

筑波大学日本文学会会報

第18号

1994年2月

変換の問題	池内輝雄	一
日本文学会だより		三
研究室だより		五
卒業生だより		九
日本文学会教官学生名簿		十四

変換の問題

池内輝雄

先日、学外でちょっとした会合があり、その帰途、数人の者と雑談をした折のこと、どうも最近の論文はおもしろくない、レベルも落ちたようだという話になった。多少のアルコールも手伝って、つい自分のことを棚に上げて勝手な放談になる。すると、私より少し年配のAさんが、

— 諸悪の根源は、ワープロにあるね。
と発言した。すると、私と同輩のBさんも、

— そうそう、ぼくも自分でやるのは嫌いだな。あれは文体をダメにする。ワープロで書いた論文って、文体に個性がないよ。
と、同調した。そこで座は、ワープロと文体という論議になってしまった。かくいう私など、数年前にワープロの便利さを吹聴してまわり、座の中に幾人かその犠牲者がいたため、ワープロ派を代表して弁護しなければならぬはめに陥った。いまだきこんな論議を、と失笑の向きもあるかもしれないが、国文学研究者の世界はまあこんなところなのである。

B氏に言われてみると確かにそんな気もする。私もかつてはBさんのようなやり方(手書き)でものを書いていたのだが、その頃の

ものと今のものをくらべるとどこが変わったかもしれない。もし変化があるとすれば、それは、手書きとワープロへ書き↓との原理（？）の違いによると思う。原理、などというとおおげさだが、ほんとにそんな気がしてじつはワープロになじんだことを反省もしているのである。

ワープロでへ書く↓とき、私はどのような手順でことを進めるか。まず言葉を思い浮かべ、キイをたたく。私はローマ字入力をしてるので、実際にはアルファベットを打っている。つまり私の頭の中では、漢字仮名混じり文↓ローマ字文というへ変換↓が行われていることになる。画面には打った文字が即座に平仮名で現れられる（機械がへ変換↓を行った結果である）。それを眼で誤りないか確認し、変換キイを押す。すると画面に漢字仮名混じり文が現れ、誤りがなければひとまずおしまいということになる。ここでは、私と機械とが共同してへ変換↓作業を行ったと言える。このようにして、私はこの一連の過程の中で最初に思い浮かべた言葉のつらなりを画面に再現することができたのである。プリントするにはさらにもうひと工程を経る。このように私は少なくとも三回か四回のへ変換↓作業を経なければ文にすることが出来ない。それにくらべて手書きの場合は、少なくとも一回だけで済むのである。

手書きは直接的だが、ワープロは中間に何度もへ変換↓を経なければならないという意味で間接的である（英語などを打つ場合は別だが）。むろん手書きの場合でも頭と手の間には限らない往復運動が行われるが、ワープロの場合はそれに避けられない必然的な要素が加わるのである。このことがワープロの打ち手と打たれた文字との間の結び付きを弱め、ひいては文体に影響して個性を失わせるかとも考えられる。しかし、それ以上に恐れるのは、へ変換↓を閲しているうちに肝心の思考が分散し、論理の矛先が鈍ってしまうかもしれないことである。もし私の文章が以前にくらべてダメになったとすれば、その原因はすべてワープロとの腐れ縁にある（ワープロ君怒らないで）。

ところで、Aさんの発言は後でちょっと心にひっかかった。そのうち、もしかするとAさんは、ヨコものをタテにへ変換↓するところで（あるいはタテものをタテにへ変換↓するだけで）論文を作り上げる現今の風潮を揶揄したのかもしれない、そうした悪しきへ変換↓の傾向をワープロに引っかけた皮肉ったにちがいないと思うにいたった。私なども自分の頭で考えることをせず、誰かがすでに展開してみせた理論や方法を用いてわかったふうのことを言ってしまうことがよくあり、Aさんの発言を思い返し、改めて赤面した。それにしても一座のものがAさんの言葉のへ変換↓を誤り、議論に花を咲かせてしまったことは、これはこれでおもしろい。

ところでまったく関係ないオチをひとつ。この夏、テレビを見ていて気に入った言葉がある。暑い盛り、店先に氷柱を置いたある店の主人が張紙していわく――「寒無料」。それにちなんで、「バブルはじけて砂利穴で踊る」と今年の世相に引っかけた見たのだが、
どうだろう。

(一九九三年 歳晩に)